

畜産センター だより

畜産技術の拠点として

畜産センター所長 矢野小夜子

本年6月の定期人事異動で京都府中丹家畜保健衛生所から赴任しました。府内の畜産の発展のため、微力ですが、頑張って参りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

この夏は西日本豪雨や記録的な猛暑に続き、大阪府北部地震や台風直撃など度重なる災害に見舞われました。被災された皆様方には心よりお見舞い申し上げます。

さて、畜産経営を巡る情勢は、TPP11や日欧EPAとの貿易協定、米国等諸外国との貿易交渉などめまぐるしく変わり、国内畜産物への影響が懸念されるどころです。また、国内では飼料価格の高止まりや後継雌牛価格の高騰、担い手不足など依然として多くの課題があります。さらに、近隣諸国では、口蹄疫やアフリカ豚コレラ、高病原性鳥インフルエンザなどの急性感染症が継続的に発生しており、国内でも高病原性鳥インフルエンザや、26年ぶりの豚コレラの発生など、衛生対策には万全の注意が必要です。

このような中、当センターでは、生産基盤の強化や生産性向上、ブランド化や安心・安全な畜産物生産のための試験研究を進めるとともに、生産農場に出向いての技術支援や、畜産への知識を深めてもらうための体験事業などに取り組んでいます。

試験研究の一部はこの紙面でも掲載させていただきますが、それ以外にも情報通信技術（ICT）を活用した牛のモニター装置の開発や、牛肉

平成30年12月
第17号

京都府農林水産技術センター
畜産センター

〒623-0221 綾部市位田町檜前

電話:0773-47-0301

FAX:0773-48-0722

MAIL:ngc-chikusan@pref.kyoto.lg.jp

URL:http://www.pref.kyoto.jp/chikken/

碓高原牧場

〒627-0248 京丹後市丹後町碓1

電話:0772-76-1121

FAX:0772-76-1123

のおいしさに関する研究、稲ホールクロップサイレージの利用拡大を進めるための研究などにも取り組んでいます。家畜伝染病予防対策のため開発した「自動式車輻消毒装置」や暑熱対策として開発した「ウシブル」などは、生産農場に活用いただけるよう普及にも努めてまいります。

また、碓高原牧場では、生産基盤強化のため、和牛受精卵の生産供給や、長期不妊牛の預託事業、交雑種に和牛受精卵を移植し生産子牛を譲渡する事業などに取り組んでいます。

今後も当センターは畜産技術の拠点として、皆様にご意見をいただきながら、時代に応じた試験研究を進めるとともに、研究成果の普及や生産現場への技術的な支援、生産基盤を支える基地としての役割を果たして行きたいと考えています。



夏休み公開行事で乳しぼり体験

試験研究の取り組み

乳牛用衣料「ウシブル」で暑熱対策

みなさんはこの夏の猛暑をどのように乗り切られましたか？

うちわや扇風機などの風を利用して涼を得る、冷たいものを食べて体温を下げるなど様々な暑熱対策を行われたことと思います。

なかには「少しでも涼しくなれば」と通気性の良い服に自然と手が伸びた方もいるのではないのでしょうか？

近年、地球温暖化の影響で夏の厳しい暑さが続いており、熱中症で体調を崩す人が増えていますが、牛も人間と同様に、暑さによって乳量の減少、食欲不振など体調を崩してしまいます。

当センターでは、暑熱対策の一つとして、分娩後や泌乳最盛期の体力が消耗しやすい乳牛を中心に「ウシブル」という衣料を着用させています。

ウシブルは、綾部市で創業されたグンゼ株式会社と当センターが共同開発した、冷感素材による乳牛用衣料です。

人は発汗時の気化熱により体を冷やしますが、牛は発汗量が少ないため、同じようにはいきません。そのため、ウシブルには加水装置が装着されており、さらに、付属の乾湿センサーによって自動的に衣料へ注水が行われる仕組みとなっています。

乳牛にウシブルを着用させ、体表面温度を赤外

線サーモグラフィで撮影したところ、体表面温度を5℃冷却することが確認できました。

また、着用の有無による影響を2か月間比較したところ、牛舎内の気温が高くなるほど（最高気温 35℃以上）、着用牛は暑熱ストレスが軽減され、乳量が多い傾向にあることも確認されています。

さらに、ウシブル着用と、牛舎内の送風機の風を組み合わせることにより、気化熱の利用効率が一層、高まることも分かりました。

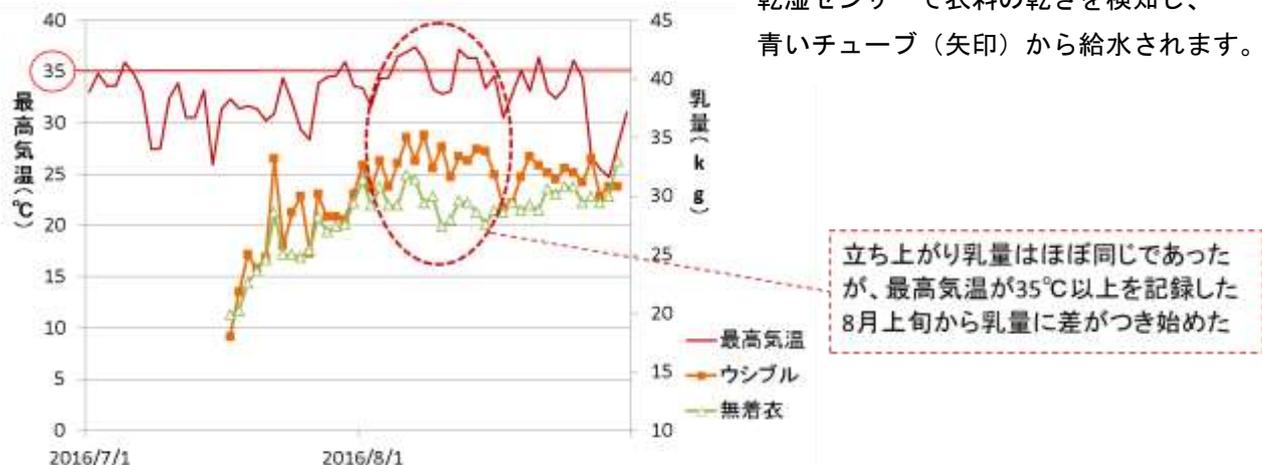
ウシブル（衣料部分）は、今年の6月に商品化され、普及に期待するとともに今後もより良い製品となるよう改良と試験を継続していきます。

（研究・支援部 山本）



ウシブルを着用した乳牛

乾湿センサーで衣料の乾きを検知し、青いチューブ（矢印）から給水されます。



ワクモがよく捕れ、簡単に設置できるトラップを開発

ワクモは、昼間は鶏舎内の隙間、物陰で集塊をつくり、夜間に鶏に寄生し、吸血するダニです。ワクモによる被害は年々増加しており、生産性の低下や、鶏痘、マイコプラズマ症などの疾病の媒介や誘発要因にもなっています。



駆除方法は、殺ダニ剤の散布が主流ですが、薬剤耐性を獲得しやすいことから有効な薬剤が少なくなってきました。また、鶏舎全面に薬剤散布が必要で、大型鶏舎ほど薬剤コストが高まり、労力負担も大きくなることから、薬剤に代わる防除方法が望まれています。

そこで、ワクモの集塊を作るという習性を利用し、大型鶏舎で使用できるワクモトラップを近藤電子株式会社と共同で開発しました。開発に当たっては、①低コスト、②捕獲能力、③着脱の容易さの3点を重視しました。

① 低コスト

開発したトラップ（以下、トラップ）は、ワクモが集まりやすい集積部と、材料費が安価で加工しやすい外装部に分かれます。サイズは、縦7cm、厚みは約1cmとコンパクトで、卵受けや隙間に設置でき、使用後は通常のゴミとして処分できます。

② 捕獲能力

一般に調査・研究で使用されるベニア板型モニター用トラップに比べて、有意に多くのワクモが捕獲できます（図1）。

③ 脱着が容易

大型鶏舎では、トラップのズレや落下が集卵ベルト等の機械トラブルの原因となります。そこで、トラップを着脱が容易かつしっかり固定できるよう改良しました（写真1）。回収時はトラップの真ん中部分を持って手前に引くと簡単に外すことができます（写真2）。

ワクモはトラップ外装部の穴や切り込みから内部に入り、集積部に集塊を作ります。また、トラップを開封すると、集積部でのワクモの捕獲状況が簡単に確認できます（写真3）。

今後はトラップを商品化して普及を行い、ワクモ被害の軽減を図ることとしていますので、興味がありましたらぜひご一報ください。

（研究・支援部 上羽）

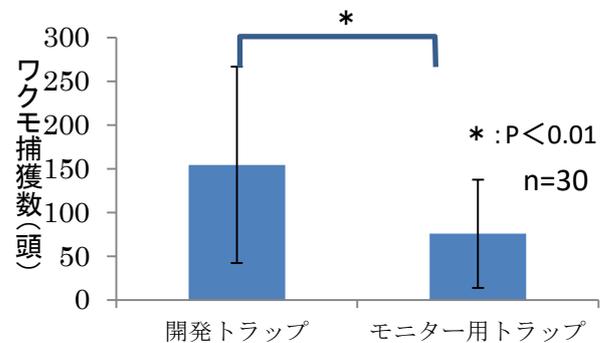


図1 トラップcmあたりのワクモ捕獲



写真1 設置



内部にある集積部

写真2 回収



写真3 集積部に捕獲されたワクモの集塊

身近な資材を利用してネズミの防除対策ができます！

鶏舎内へのネズミの侵入は、機材の破損などの経済的損失だけでなく、鳥インフルエンザウイルスなどの病原体を媒介する可能性があり、その対策は重要な課題です。

今回、産卵鶏をケージ飼養している開放型鶏舎において、センサーカメラを用いてネズミの行動を調査し、その結果をもとに防除対策を検討しました。



使用したセンサーカメラ

① バンクリーナーのチェーン部分の隙間

密閉が困難なバンクリーナーのチェーン部分を金属性の鎖と鉄板と組み合わせた蓋を作成し、塞ぎました。



金属チェーンが隙間を塞ぐ

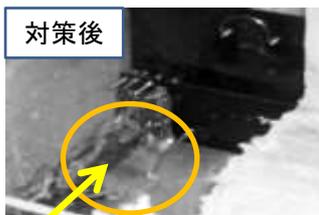


鉄板を組み合わせた蓋



対策前

バンクリーナーチェーン部分から出入りするネズミ

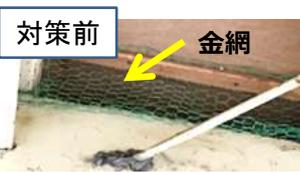


対策後

新しい蓋により出入り出来なくなったネズミ

② 妻面の隙間

一般的に金網で閉鎖されていますが、高所にあり死角ができやすく、ネズミが穴を開けても発見が困難であることから、鉄板（厚さ1.6mm）で完全に塞ぎました。



対策前

金網



対策後

鉄板

③ リップ溝形鋼の隙間

軽量鉄骨造りの母屋材、横棧に使用されるリップ溝形鋼等の軽量形鋼は鶏舎外に出ており、侵入経路となるため、リップ溝形鋼内の断面の大きさに合わせて切断したフリーアングルを六角ボルトで固定し、塞ぎました。



鶏舎外部に出ている軽量形鋼



対策前



対策後



断面図

④ いびつな隙間

周囲と接着でき、高い位置の穴にも対応可能で、比較的安価に作成できる、ラスモルタル（モルタル [セメントと砂を1:2~3の重量で混和]）とスチールタワシをほぐして混ぜ、水を入れてよく練る、これを塞ぎたい場所に埋めて乾燥させ固まれば完成）で塞ぎました。



スチールタワシ



使用例

①~④を組み合わせ、同時に隠れ場所を無くすなど生息しにくい環境への変更や殺鼠剤で駆除を行ったところ、対策前はカメラで130回/日撮影されていたのが、対策後は0回になり、ネズミ防除に成功しました。(研究支援部 上羽)

新「京地どり」の鶏種を決定しました！

京都府が作出し、28年前に供給を開始した「京地どり」は肉質が良く“きゅっと歯ごたえ”をキャッチフレーズに消費者に根強い人気があります。

しかし、発育が遅く生産コストが高いため、生産者からは肉質を維持したままで発育が良くなるよう、改良の要望がありました。そこで、現「京地どり」の組み合わせである3鶏種（横斑プリマスロック、名古屋、大型軍鶏）のいずれかが1/2以上を占める交配をすること、現在よりも肉質が落ちず、増体に優れることを条件とし、新「京地どり」の作成を行うこととなりました。

2種類の組み合わせ鶏種を候補鶏（候補鶏①：龍軍鶏ごろろう♂×横斑プリマスロック♀、候補鶏②：大型軍鶏♂×横斑プリマスロック♀）とし、現「京地どり」に給与している飼料を用いて発育、肉質及び食味調査を行いました。

その結果、体重はどちらの鶏種とも雄は80日齢、雌は100日齢で出荷体重に到達し（♂：3.5kg、♀：3.2kg）（図1）、飼育期間を約20～40日短縮でき

る結果となりました。

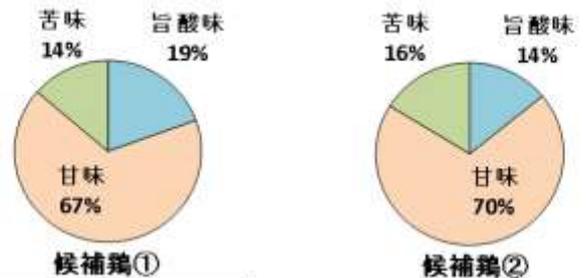
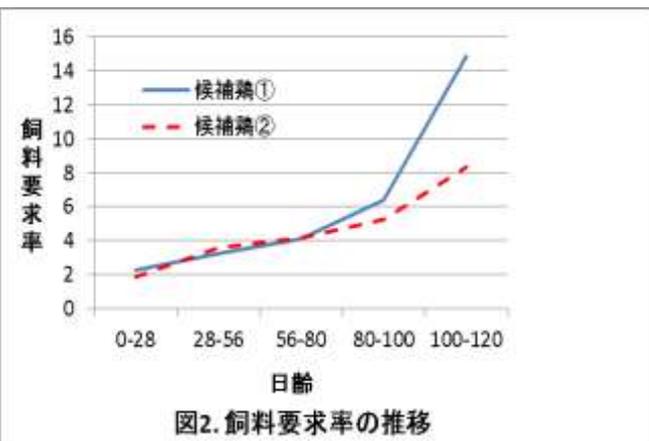
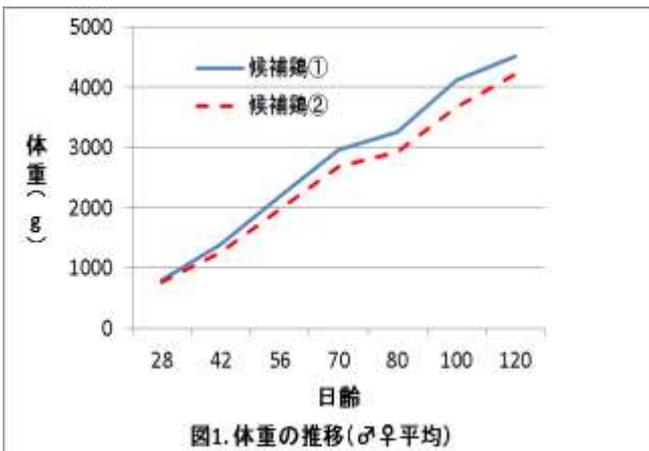
また、飼料要求率は100日齢を越えると急激に悪くなることから（図2）、その日齢までに出荷すれば飼料費削減につながる事が分かりました。

肉質調査では、アミノ酸、イノシン酸、脂肪酸、剪断力価の測定を行った結果、どの項目も鶏種の違いによる差は見られませんでした（図3）。

「京地どり生産・流通推進協議会」において、これらの調査結果を報告し協議したところ、新「京地どり」の鶏種は、現「京地どり」の味に匹敵すると評価された「大型軍鶏♂×横斑プリマスロック♀」に決定しました（写真1）。

しかし、腹腔内脂肪が多く付着していたことから（写真2）、現「京地どり」の飼料ではエネルギー過剰と推察され、今年度から新「京地どり」に適した給与飼料を決定するための試験を開始しています。

今後も、生産コストを抑え、美味しい新「京地どり」を府民の皆さんに食べていただけるよう取り組みを進めます。（研究・支援部 中野）



旨酸味：グルタミン酸、アスパラギン酸
 甘味：セリン、グリシン、スレオニン、アラニン、リジン
 苦味：アルギニン、シスチン、チロシン、バリン、メチオニン、イソロイシン、ロイシン、フェニルアラニン

図3 アミノ酸組成



写真1 新「京地どり」(左：♂、右：♀)



写真2 過剰に付いた腹腔内脂肪

事業・業務の取り組み

サポートカウを活用して地域の活性化を！

サポートカウ事業とは

畜産農家の繁殖和牛を地域住民と連携して放牧することにより、耕作放棄地の雑草対策を行っています。また、山と里との間に緩衝地帯を作ることにより、野生動物を農地や人家に近づけないようにし、農作物が受ける獣害を低減することも目的としています。

京丹波町内での取り組み

京丹波町西河内地区は、旧和知町の北部に位置する中山間地域です。近年、シカ・イノシシなどの野生動物による農作物被害が深刻となり、耕作放棄地が増加しています。

そこで、同地区では平成17年から京都府が推進していたレンタカウ（碓高原牧場から地域に牛を貸し出し放牧する）事業に取り組むこととなり、平成22年には町内の和牛繁殖農家を含めた「西河内放牧組合」を立ち上げ、サポートカウ事業に取り組んでいます。

平成30年度には農家の繁殖和牛延べ4頭を1haの農地に放牧し、地域から「放牧による雑草除去で景観が良くなった。」「獣害が減少した。」との声が聞かれました。

当センターは市町、振興局、家畜保健衛生所と協力して、放牧指導に当たっていますが、今後も牛を活用した地域の活性化を、積極的に支援していきます。（業務部 岩本）



放牧されている和牛

和牛の「受精卵生産・譲渡事業」について

碓高原牧場では、受精卵移植技術を活用した和牛の改良と増殖を図るため、繋養する和牛から受精卵を採取し、府内の農家に供給する「受精卵生産・譲渡事業」を行っています。

中丹家畜市場における和牛子牛の取引頭数は、平成24年度以降500頭台前半で推移しています。出荷される子牛の出生由来を見ると、和牛を飼養する農家の減少に伴い、受精卵移植（ET）由来の頭数は約100頭、割合でも20%前後で推移し、29年度は140頭を超えるなど、今やET和牛子牛は、せり市を支える重要な資源となっています。

このようなET和牛子牛の需要増加に対応して、受精卵生産も飛躍的に増加しています。

平成24年度と28年度の実績を比較しますと、平均採胚回数 は 64.8 回から 124 回に倍増し、平均正常胚数は 346.4 個から 618 個と大きく増加しました。

生産した受精卵はJA等に譲渡された後、府内の乳用牛への移植に活用されるほか、当场で繋養するF1や乳用育成牛に移植されるなど、ET和牛子牛の生産に役立っています。

本事業は30年以上の歴史があり、培われた高度な技術の研鑽とその伝達を図りながら、農家の期待に応えられるよう、引き続いて取り組んでいきます。（碓高原牧場 山内）

過去の子牛せり市取引頭数

年 度	24	25	26	27	28	29
全取引頭数	529	523	512	543	516	549
人工授精産子頭数	431	422	420	424	407	405
受精卵産子頭数	98	100	92	119	109	144

「乳用牛育成譲渡事業」について

碓高原牧場では毎年府内の酪農家から購入した子牛を育成、受胎させて分娩予定日の約2か月前に購入先へ再度譲渡を行っています。

本事業は酪農家の乳用牛育成にかかる負担軽減と、併せて、和牛受精卵を移植、受胎させることにより府内産和牛を増殖する取り組みであり、昭和54年度の開場時から今年で41年目となり、現在まで延べ約1,000頭を譲渡しています。

また、近年では受け入れ頭数よりも酪農家からの申請頭数が上回っている状況で、譲渡時には「大きく育っている。」「牛がよくできている。」等の高い評価を頂いています。

当场ではこれまでの酪農家の皆様からの評価を励みに、またご助言、ご指摘等を参考にしながら乳用牛の公共育成牧場として、今後もより一層、お役に立つよう努めて参ります。

(碓高原牧場 岡本)



放牧中の乳用牛



乳用牛の譲渡会

和牛子牛の肺炎・下痢対策

子牛の肺炎や下痢は、繁殖農家にとって、なかなか防止できないとても大きな課題です。今回、当场で取り組んでいる対策を3つ紹介します。

1つ目は、保温と換気。特に冬期の寒さ対策として、子牛房の中に木製の保温箱を設置することで子牛の適温を維持しています(写真1)。また、子牛が濡れると体温が奪われることから牛床を乾燥した清潔な状態を保ち、汚れが目立つ前に敷料を交換することが重要です。さらに、当场では、冬期でも日中の気温が高い時間帯に換気を行うことにより、保温をしながら牛舎内に新鮮な空気を取り入れ循環させています。

2つ目は、初乳の確実な摂取による免疫強化です。初乳の吸収効率は分娩後時間の経過で減少し、約24時間後にはほぼ消失することから、生後1～2時間に2～3ℓ初乳を飲ませ、その後12時間以内に再度2～3ℓ飲ませています。さらに、初乳の免疫力をあげるため、下痢を引き起こす大腸菌や、牛伝染性鼻気管炎等のウイルス性呼吸器病対策のワクチンを、分娩予定日1月前と半月前に母牛に接種しています。

そして3つ目は、下痢をしてしまった場合の治療です。子牛の軽度の下痢症の治療には粉末の乳酸菌製剤と薬用炭を使用しますが、水に溶かして

口の中に流し込む方法で誤嚥性肺炎ごえんを引き起こす可能性があることから、当场では、少量の水で団子状にし、口の中に擦りつけて与えています(写真2)。

今回は、当场で取り組んでいる3つの対策をご紹介しましたが、興味を持たれましたらお気軽にご相談ください。(碓高原牧場 岩田)



(写真1)保温箱で寒さをしのぐ子牛

(写真2)団子状の乳酸菌製剤



子ヤギを飼ってみてはいかがでしょうか。

碓高原牧場では、和牛や乳牛の他に、府民の方に家畜に親んでもらえるよう、ふれあい牧場を設置し、ヤギ（ザーネン種、トカラ種）、羊（コリデール種、サフォーク種）、ポニーなどの動物を飼育しています。毎年約3万人の来場者があり、人気の観光スポットとなっています。

ふれあい牧場では、ヤギ等の自然交配を行い、春に子ヤギや子羊が生まれます。その中で、畜産を身近に感じてもらうため、府民の方に生まれた子ヤギ等を譲渡する取り組みを行っています。

また、ヤギ等を飼うことが始めての方や不安に思われている方には、ヤギの貸出も行っていますので、一度体験してみてもはいかがでしょうか。

今年度は8件11頭の譲渡を行い「庭の草刈りも助かるし、地域の子どもたちの人気者になっている。」などの声が聞かれました。

ヤギの飼育に興味がある方は会場までお問い合わせください。（碓高原牧場 山崎）



ふれあい牧場の様子



譲渡する子ヤギ（生後3か月、約10kg）

農場訪問

～ 肉用肥育牛 ～ 有限会社京都丹波牧場（南丹市）

今回、「京のこだわり畜産物生産農場」の肉用牛肥育農家の中で第1番目に登録され、昨年、和牛のオリンピックと言われる「全国和牛能力共進会宮城県大会」の肉牛の部において、第2位を受賞されたほか、直近の近畿東海北陸連合肉牛共進会では2年連続農林水産大臣賞を受賞されるなど、優れた実績で知られる（有）京都丹波牧場の平井和恵専務取締役にお話を伺いました。

京都は年間消費量が常に上位になるなど、古くから牛肉が好まれ、明治から続く老舗のすき焼き店もあります。そのような風土の中、自然豊かな南丹市で明治以前から牛を飼われ、現在の代表である平井一三代表取締役（四代目）、後継者である和恵さん（五代目）が、府内で計1,500頭の和牛を飼養されています。

最高の牛肉を消費者に届けるために、長年培われた、牛を見る目で最良の子牛を選定し、新鮮な地下水と良質な餌を給与し、牛房にはたくさんのオガクズを敷くなど、牛にストレスを与えないようにじっくりと時間をかけて匠の技で育てられています。

このように育てられた牛は、府のブランド和牛肉である「京都肉」や「京の肉」を生み出しています。また、京都の海外向けブランド「Kyoto Beef 雅」としてアジアを中心にEU等にも輸出されており、海外からも注目されています。

今年度、繁殖牛舎を建設予定で、繁殖・肥育一貫経営を目指されています。

また、SNSを活用した京都府産和牛のPRも積極的に発信されています。

今後も引き続き、府内産和牛の生産を牽引していただきたいと思えます。

（研究・支援部 村上）



専務取締役の平井和恵さん

～ 乳用牛 ～ 村上知行さん（綾部市）

酪農家に生まれた村上知行さんは、大学で畜産学を学び、家畜人工授精師として農業協同組合に勤務されていました。しかし、農家巡回中、若い酪農家が頑張っている姿をみて「酪農家の息子としてこれでいいのか？」と思い、52歳で実家の酪農を継がれました。

昨年、廃業された酪農家のつなぎ式牛舎を買い取り、国の畜産クラスター事業を活用し、全国でも事例がない糞尿分離型のフリーストール牛舎に改築し、パーラー排水や分離された排水は当センター方式の汚水処理施設で処理されています。

また、省力化のため餌寄せロボットや搾乳ロボット、ICTを活用した監視システムを導入されました。この結果、現在、60頭の乳牛をほぼ一人で管理することができ、日帰りで出かけることも可能だそうです。経営に対する考え方をお聞きしたところ、「エサを食べたい時に食べられ、寝たい時に寝られ、乳を搾って欲しい時に搾れる、人間の都合ではなく牛の好きなようにさせてやり

たい。」と、牛が自由に過ごせる環境作りに力を注がれていることが分かります。

今後は、「酪農教育ファームの認証を得て、省力的に酪農ができることを知ってもらい、一人でも酪農がしたいと思ってくれる人ができたらいいな。」と語ってくださった村上さん。

新しい技術や工夫を織り交ぜながら実践しておられる村上牧場に、これからも目が離せません。
(研究・支援部 山本)



経営者の村上知行さんとお孫さん

～ 肉用繁殖牛 ～ 吉岡正行さん（福知山市）

今回は福知山市の吉岡牧場を訪ねました。

吉岡正行さんは、京都府職員として勤務されていましたが、碓高原牧場への異動をきっかけに自分でも和牛を飼いたいとの思いが強くなり、平成13年に共同牛舎を借りて繁殖雌牛1頭で肉用牛飼育をスタート。その後、徐々に増頭し、平成25年に経営に専念するため京都府を早期退職し、現在は専業農家として20頭の繁殖雌牛を飼育されています。

吉岡さんに「飼養管理のこだわり」について尋ねると、「牛が良くなるのであれば少々の手間や投資はいとわない」と前置きされたあと、次の3点を挙げられました。

1つ目は「蹄病予防」。年に2回、自ら削蹄されています。2つ目は「分娩事故防止」。膣内に挿入した温度センサーが破水で体外に放出されると携帯電話に通知するシステムを導入され、分娩異常の早期発見・早期対応、分娩管理の省力化に大きな効果をあげているとのこと。そして3つ目は「暑熱対策」。平成26年に当センターの指導のもと、牛舎内温度をセンサーが感知し自動運転する送風機を4台導入されるなど、牛の過ご

しやすい牛舎環境づくりに力を入れておられます。

また、吉岡さんは和牛の血統、改良に造詣が深く、現在は自家生産牛が約5割ですが、「子牛せり市や枝肉共進会で好成績を出した母牛が産んだ雌子牛を積極的に保留し、すべて自家産牛にしたい。」という思いを強く持っておられます。

「これからも、計画的に牛群改良をすすめ、全国和牛能力共進会で上位入賞したい。」と意気込みを語っておられました。

(碓高原牧場 辻)



経営者の吉岡正行さん

～ 養鶏 ～ 岡本ファーム（福知山市）

福知山市夜久野町にある岡本ファームでは、京地どりを年間2,400羽出荷されています。

20歳になった頃から50年近くブロイラー飼育に携わり、飼育のノウハウを身につけ、最近では息子さんと共に頑張っておられます。

そんな中、特急電車から窓の外を眺めている時、「綾部や丹後など、どこでも美味しい名物があるのに福知山市には何もない。」とふと思ひ、福知山市の名物となるものを作りたいと思われたそうです。

それがきっかけとなり、平成26年1月に京地どりの飼育を始められ、11月には「京のこだわり畜産物生産農場」に登録されたことで、「製品に対するイメージアップにつながってきた。」と話されていました。

飼育する上での一番のこだわりは環境衛生面とのこと。鶏舎内部や周辺環境美化に努められ、

また、美味しい鶏肉を生産したいという思いから、鶏肉の臭みを消すための配合を考えるなど、飼料にもこだわっておられます。

敷料も定期的に攪拌することで常に乾いた状態を保ち、屋根には暑熱対策の塗料を塗るなど、鶏が過ごしやすい環境を維持されています。

「京都のブランド鶏肉として全国に京地どりを広め、昨年9位を獲得した「日経 MJ バイヤーランキング※」で5位になることを目標として、今後も頑張っていきたい。」と熱く語られる姿に期待が膨らみます。

（研究・支援部 中野）

※日経新聞グループが、百貨店やスーパーで精肉の仕入れを担当しているバイヤーを対象として調査したランキング



経営者の岡本嘉明さん

編集後記

【 目次 】

- 巻頭あいさつ・・・P 1
- 試験研究・・・P 2～P 5
- 業務・事業・・・P 6～P 8
- 農場訪問・・・P 8～P 10

【 職員の異動 】

今年度の定期人事異動による転入者は下記のとおりです。

転入者		転入元
氏名	所属・職名	
矢野 小夜子	所長	中丹家畜保健衛生所
津田 義郎	業務部長	農林水産部農政課
西田 宏子	業務部・主査	福知山児童相談所
岡田 幸大	業務部・副主査	中丹家畜保健衛生所
鳥谷 尚志	業務部・技師	中丹広域振興局
山本 祐実	研究支援部・技師	新規採用
田中 穂積	碓高原牧場・場長	当センター業務部
西垣 正三	碓高原牧場・課長補佐	織物・機械金属振興センター
宮城 信司	碓高原牧場・主任研究員	農林水産部畜産課
山崎 光容	碓高原牧場・技師	当センター業務部

当センターのホームページもぜひ、ご覧ください。
試験研究の成果、トピックス、イベント、活動状況などを掲載しています。

<http://www.pref.kyoto.jp/chikken/>